

平成22年 6月 8日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19730385
 研究課題名 (和文) 少子化社会における子どもの仲間関係の発達メカニズムの解明：0歳からの縦断的検討
 研究課題名 (英文) The longitudinal study of developmental process of peer relationships in infancy: from 0 to 3 years old
 研究代表者
 酒井 厚 (SAKAI ATSUSI)
 山梨大学・教育人間科学部・准教授
 研究者番号：70345693

研究成果の概要 (和文)：乳幼児期の仲間関係の発達メカニズムについて、乳児期の親子間の愛着関係から強い影響を受けて進展するモデルと生後まもなくから周囲にある対人ネットワークの大きさの影響を受けて進展するモデルの両者から検討した。約300名の0歳児を3歳まで追跡調査した結果、3歳での子どもの仲間数や遊ぶ頻度の多さを有意に予測したのは、愛着に関わる要因ではなく、0歳時点の対人ネットワークの大きさや、2歳時点の託児施設の利用や親のピア・マネージメントの高さであった。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study was to investigate the developmental process of peer relationships in infancy by comparing two basic theories. First is the Attachment Theory which shows the importance of parent-child intimate relationship and second is the Social Network Theory which represents the importance of personal networks around children in infancy for their peer relationships later. Participants were approximately 300 children who were followed-up from 0 to 3 years old. The results showed that the number of peer and the frequency of play with mates at age 3 were not predicted by the attachment-related variances, but by the size of a personal network at age 0, whether or not a child attends a childcare center at age 2 and the frequency of mother's peer management at age 2.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	0	1,700,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：仲間関係 発達メカニズム 信頼感 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

友人は、私たちの日々の生活を有意義なも

のにしてくれるかけがえのない存在である。
 多くの先行研究 (Parker & Asher, 1993;

Rotenberg, Boulton, & Fox, 2005; 酒井・菅原・眞榮城他, 2002; 酒井, 2002) から、良好な友人関係は、子どもの社会性や心理的な成熟を促し、精神的な安定を与え、社会に適應するための助けになることが認められている。しかし、少子化が進行する現代社会では、こうした友人関係を形成する機会が減少するに伴い、他者への信頼感や対人関係スキルなどの社会性の発達が未熟であり、自己への“カプセル化”や自己愛化する青少年の問題が取り上げられるようになってきている。そのため、我が国では、こうした少なく生まれる子どもたちの社会変化と社会性の発達に関する実態を把握し、具体的な育成支援策を探索することが急務であるといえよう。本研究は、現代社会における乳幼児期の子どもの友人関係の発達に注目するとともに、それによる社会性の発達や社会的適應への影響について検討することを全体構想としている。今回の研究期間は、その友人関係の萌芽時期にあたり、0歳から3歳のあいだに生まれる友人関係の萌芽形態としての仲間関係に注目し、その発達メカニズムについて検討を行う。

2. 研究の目的

本研究は、子どもの仲間関係の発達メカニズムについて2つのモデルから比較検討するものである。第1のモデルは、乳児期における親子間の愛着関係 (Bowlby, 1969) から最も強い影響を受けて進展していくとする愛着基点後形成モデルである。第2のモデルは、生後まもなくから周囲にいる親や仲間、それ以外の他者を含む対人ネットワーク (Lewis, 1983) の影響を受けて進展していくとする社会的ネットワークモデルである。前者に関しては、乳児期における親の子どもに抱く信頼感と子どもが親に抱く愛着が後の時点における仲間との関係性に直接的に影響する仮説である。後者については、乳児期において関わる他者が親以外にどれだけ豊富であるか、それらの他者と関わる機会の多さが、子どもの仲間との関わり方に影響するという仮説である。

愛着関係や対人ネットワークの個人差が、1歳以降の子どもの仲間関係の発達に与える影響について検討する場合には、子どもの仲間関係の発達に関わるとされる子ども側要因 (気質など) との関連を考慮する必要がある。さらに、親が子どもの仲間関係を意識的に形成しようと試みる態度 (ピア・マネージメント) との関連も検討することが重要であ

る。本研究では、子どもの気質やピア・マネージメントを含め、仲間関係の発達メカニズムについてより詳細な検討を行う。

また、今回の研究課題では、3歳以降の仲間関係の発達に関する今後の研究を進展させるために幼稚園期の子どもを対象に横断調査を実施した。とくに、3歳以降に本格化すると考えられる親のピア・マネージメントに注目し、親の育児ストレスと精神的健康およびソーシャルサポートとの関連から検討したので報告する。

3. 研究の方法

本研究は2つの研究から構成された。

研究1は、関東近県在住の0歳の子どものいる家庭を対象に実施した縦断的調査であった。子どもが0歳、2歳、3歳の時点で実施し、全時点に参加し回答 (母親による) が有効であったのは317家庭 (男子150名、女子167名) であった。母親の平均年齢は32.1歳であった。

研究2は、0~2歳の双生児のいる36家庭、3~4歳の双生児のいる39家庭、5~6歳の双生児がいる47家庭を対象とした横断調査であった。子どもの平均月齢は50.5ヶ月、母親の平均年齢は38.3歳であった。

今回の報告で使用した調査内容 (質問紙調査) は以下のとおりである。

(1) 研究1

① 社会経済変数

家庭の経済状況として夫の収入を11段階 (1:100万円未満~11:1200万円以上) で尋ねた。また、母親の学歴について5段階 (1:中学卒業~5:大学院卒業) で尋ねた。

② 子どもの他者への親和的気質 (報酬依存: 0歳時点)

子どもの気質に関する測定尺度 (菅原ら, 2001) のうち、報酬依存に関する3項目 (「他のなによりも人間に興味を示す」など) を使用した (5件法)。項目間の内的整合性を示す α 係数は.48と低かったが、項目数が少なかったことによると思われる。

③ 親が子どもに抱く信頼感 (0歳時点)

親が子どもに抱く信頼感尺度 (酒井, 2005) を使用した。この尺度は、「○○ちゃんはだれよりも私のことを信頼していると思う」や「○○ちゃんのことは信頼できる」に代表される10項目 (5件法) で構成された。全項目の合計得点が高いほど信頼感が高いことを示す ($\alpha=.77$)。

④ 子どもの愛着 (2歳時点)

愛着を測定するQソート項目を参考に、子どもの親に対する愛着を測定する尺度を開

発した。この尺度は、「遊んでいるとき、ときどき私を呼んだり、私のところに戻ってきたりする」に代表される8項目(5件法)で構成され、全項目の合計得点が高いほど愛着が高いことを示す($\alpha = .70$)。

⑤子どもの対人ネットワーク

子どもの対人ネットワークとして、母親が子どもを預けることができる他者を10種類の対象から複数選択してもらった。各対象は、母親との関係性の親密さから、配偶者、親族(自分または配偶者の親やきょうだい)、友人(友人と近所の人)、専門家(保育園、ベビーシッター、その他託児施設)の大きく4つのレベルに分けられた。各レベルに属する対象を一人でも選択した場合に、子どもにそのサイズの対人ネットワークがあると判断し、0~4までの5段階で評価した。

⑥親による子どものピア・マネージメント

母親が子どもの仲間関係を斡旋する程度を測定するピア・マネージメント尺度(酒井, 2009)を実施した。表1には、研究1の対象児が2歳と3歳時点での各尺度項目(3項目・5件法)の回答分布を示した(α 係数は2歳が $\alpha = .42$ 、3歳が $\alpha = .41$ と低かったが、ともに項目数の少なさによるものと思われた)。

表1 2,3歳時点での母親によるピア・マネージメント (値は%)

	2歳時点(284名)					3歳時点(280名)				
	[5]	[4]	[3]	[2]	[1]	[5]	[4]	[3]	[2]	[1]
子どもが家庭内外でお友だちと遊ぶための場を設定した	0.7	5.6	14.8	33.5	45.4	0.0	5.4	13.2	36.1	45.4
子どもがお友だちをつくれるような場所に連れて行った	0.4	7.0	8.8	32.4	51.4	0.0	6.4	8.6	31.1	53.9
子どもが家庭外でお友だちと遊ぶための特別な活動をした	14.4	32.0	24.6	20.8	8.1	4.6	32.5	27.1	20.7	15.0

注) ここ1ヶ月の間、 [5]:ほとんど毎日した [4]:5~6回程度した [3]:3~4回程度した [2]:1~2回程度した [1]:まったくしていない

⑦子どもの友人数と遊ぶ頻度

子どもと一緒に遊ぶ友人(仲の良いという教示)について1:なし~7:10人以上までの7件法で尋ねた。友人と遊ぶ頻度に関しては1週間で平均して1:なし~5:ほとんど毎日までの5件法で回答を求めた。

(2)研究2

①社会経済変数

家庭の経済状況として夫の収入を16段階(1:100万円未満~16:1500万円以上)で尋ねた。

②親による子どものピア・マネージメント
上記⑥と同じピア・マネージメント尺度(酒井, 2009)を実施した。

③母親の育児ストレス

持田(2007)による育児ストレス尺度をふたご用に改変して使用した。“ふたごの子育

てが重荷に感じられる”や“ふたごの子育てに自信が持てるようになった(逆転項目)”に代表される6項目で構成され(5件法)、合計得点が高いほど育児ストレスが高いことを示した。全6項目の α 係数は.80であり、尺度の信頼性が認められた。

④母親の精神的不健康度

日本版GHQ精神健康調査票の短縮版(成田, 2001)を使用した。本尺度は、ここ数週間における精神的に不健康な状態の程度を測定する12項目から構成され、不完全な文章の末尾を選択して回答する形式となっている(例、“心配事があって、よくねむれないようなことは”の末尾を、まったくなかった、あまりなかった、あった、たびたびあった、の4つから選択)。各項目は1~4点までの4段階で評定され、全項目の合計得点が高いほど精神的に不健康な状態であるとした($\alpha = .78$)。

⑤育児に関するソーシャルサポート

酒井(2008)が作成した育児サポート・ネットワーク尺度を使用した。この尺度は、母親が子育てについて相談する相手とその頻度を14の対象それぞれについて評定してもらうものであるが、本研究ではそのうち家族・親族に該当する5対象(自分と配偶者の親など)と、友人に該当する4対象(自分の友人、子育てサークルの仲間など)からのサポートについて4:いつもしている~1:したことはないまでの4件法で回答を求めた。各項目群の合算を家族・親族からのサポート得点と友人からのサポート得点として使用した(家族・親族サポート: $\alpha = .56$ 、友人サポート: $\alpha = .67$)。

4. 研究成果

(1)研究1

①子どもの対人ネットワークの実態

対人ネットワーク変数である家族形態、保育施設の利用有無、対人ネットワークの回答から、まず本研究の対象家庭は核家族が92.0%、拡大家族が8.0%であった。託児施設に関しては、対象児が0歳時点で何らかの施設(保育ママやベビーシッター、近所の家等も含む)に定期的に預けているのが8.9%、2歳時点では28.8%、3歳時点では27.0%であり、子どもの年齢が高くなるほど預ける家庭が多くなっていった。また、0歳時点の対人ネットワークのサイズが0(なし)は4.5%、1(配偶者のみ)が11.6%、2(配偶者と親族)が63.1%、3(配偶者と親族と友人)が17.5%、4(配偶者と親族と友人と専門家)が3.4%であった。

②各変数の性差

本研究では、子どもと一緒に遊ぶ友人数と遊ぶ頻度を目的変数とし、それらを説明する

要因について多変量解析により検討することを目的としている。解析に先立ち、各変数の性差について検討した。表2と表3には、子どもと一緒に遊ぶ友人数と遊ぶ頻度の回答分布を男女ごとに示している。t検定の結果、男女間に有意差は見られなかった。つぎに、説明変数である親子間の愛着、子どもの対人ネットワーク、子どもの気質、母親によるピア・マネージメントに関する各変数の性差について検討したところ、子どもの親への愛着に関して性差が認められ、女子の方が男子に比べて有意に得点が高かった ($t[279]=2.94, p<.01$)。

表2 2,3歳時点における子どもと一緒に遊ぶ友人数 (値は%)

		一緒に遊ぶ友人数						
		10人以上	8~9人	6~7人	4~5人	2~3人	1人 なし	
2歳	男子	5.1	1.4	9.4	24.6	29.7	3.6	26.1
	女子	8.3	4.8	5.5	24.1	26.2	2.8	28.3
3歳	男子	3.0	2.2	7.5	32.8	32.8	3.0	18.7
	女子	8.3	5.0	8.3	24.8	33.1	2.1	17.9

表3 2,3歳時点における子どもが仲間と遊ぶ頻度 (値は%)

		一緒に遊ぶ回数				
		[5]	[4]	[3]	[2]	[1]
2歳	男子	10.1	21.6	36.7	20.9	10.8
	女子	17.9	19.3	35.2	17.2	10.3
3歳	男子	9.0	21.6	35.1	23.1	11.2
	女子	13.8	20.7	38.6	17.9	9.0

注) 1週間に、[5]:ほとんど毎日お友だちと遊んでいる
 [4]:4~5日遊んでいる [3]:2~3日遊んでいる
 [2]:1日くらい遊んでいる [1]:お友だちと遊ぶ日はほとんどない

③3歳時点の友人数と遊ぶ頻度への影響要因

子どもが3歳時点における友人数と遊ぶ頻度を説明する要因について検討するため、それぞれの変数を目的変数とする階層重回帰分析を実施した。説明変数として投入した順序は、a)社会経済変数:家庭収入(0歳)・母親の学歴、b)属性と気質:子どもの性別と親和的気質(0歳)、c)親子間の愛着:母親が子どもに抱く信頼感(0歳)・子どもの親に抱く愛着(2歳)、d)対人ネットワーク:託児施設の利用有無(0歳、2歳)・家族形態(核家族か拡大家族か:0歳)・対人ネットワーク(0歳)、e)母親によるピア・マネージメント(2歳)、f)2歳時点の友人数(従属変数が3歳時点の友人数の場合)もしくは遊ぶ頻度(従属変数が3歳時点の頻度の場合)であった。

友人数に関する結果では、上記の e)と f)

の変数群を投入した際にモデルが有意であり、e)の変数群の投入時には、対人ネットワークの大きさ($\beta=.18, p<.01$)と2歳時点の託児施設の利用($\beta=.21, p<.01$)とピア・マネージメントの高さ($\beta=.34, p<.01$)が、f)の変数群の投入時には、2歳時点の友人数の多さ($\beta=.63, p<.01$)が、3歳時点の友人数を有意に予測していた。全変数投入時の説明率は $R^2=.45$ であった。

遊ぶ頻度に関しては、上記の d)、e)、f)の変数群を投入した際にモデルが有意であった。d)の変数群を投入した際には対人ネットワークの大きさ($\beta=.16, p<.05$)と2歳時点の託児施設の利用($\beta=.41, p<.01$)が、e)の変数群を投入した際には対人ネットワークの大きさ($\beta=.15, p<.05$)と2歳時点の託児施設の利用($\beta=.49, p<.01$)とピア・マネージメントの高さ($\beta=.25, p<.01$)が、f)の変数群を投入した際には託児施設の利用($\beta=.21, p<.01$)と2歳時点の遊ぶ頻度($\beta=.63, p<.01$)が、3歳時点の遊ぶ頻度を有意に予測していた。全変数投入時の説明率は $R^2=.55$ であった。

④研究1のまとめ

以上の結果から、3歳時点の子どもの友人数や仲間の頻度を説明する要因としては、乳児期における親子間の愛着に関わる変数よりも、対人ネットワークに関する変数が優勢であった。とくに2歳時点での託児施設の利用による予測力は高く、2歳で同年代の仲間と触れ合う機会が多いほどその後の友人関係の形成をスムーズにすることが示唆される。また、親との情緒的な関係性ではなく、親が子どもの仲間関係を積極的に形成しようとする態度が子どもの友人関係の発達には重要であることも示唆された。

(2)研究2

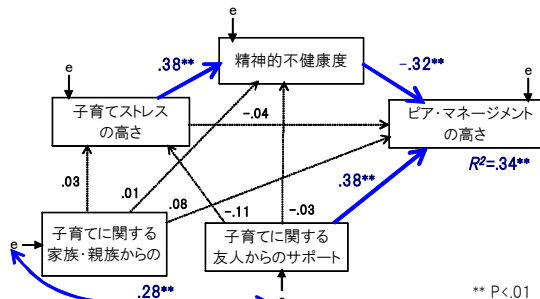
①発達段階によるピア・マネージメントの比較

母親による子どものピア・マネージメントに関して、子どもの発達段階(0-2歳、3-4歳、5-6歳)と性別の組み合わせを独立変数とする2要因の分散分析を実施した。その結果、“子どもが家庭内外でお友だちと遊ぶための場を設定した”の項目に関して発達段階による主効果が見られ($F[2, 112]=5.16, p<.01$)、多重比較から5-6歳群の方が0-2歳群に比べて有意に得点が高いことが示された。つぎに、子どもの発達段階により優先されるピア・マネージメントの内容を知るため、ピア・マネージメントの種類と双生児きょうだいの性別の組み合わせを独立変数とする2要因分散分析を行った。その結果、ピ

ア・マネージメントの種類に主効果が見られ ($F[2, 112]=5.16, p<.01$)、 “子どもがお友だちをつくれるような場所に連れて行った”、 “子どもが家庭内外でお友だちと遊ぶための場を設定した”、 “子どもが家庭外でお友だちと遊ぶための特別な活動をした” の順に得点が高くなっていった。

②ピア・マネージメントに関連する要因

母親によるピア・マネージメントに関わる要因を検討するため、従来の養育態度に関するストレス研究モデル (佐藤他, 1994) を参考に、母親の育児ストレス、精神的不健康度、育児ソーシャルサポートの各変数から成る図1のようなパスモデル (図1) を構成した。なお、ピア・マネージメントは子どもの発達段階により異なると予想されたのでその違いを考慮し、共分散構造分析に基づく多母集団同時分析を行った。解析の結果、どの年齢段階の場合にも構造が同じと仮定したモデルが最適であると判断された ($\chi^2=33.4, DF=43, p=.85, AGFI=.86, RMSEA=.00$)。最終的なモデルを図1に示す。この図を見てわかるように、母親の育児ストレスの高さは精神的健康を悪化させ、結果的にピア・マネージメントを低下させる抑制要因であることが示された。一方で、育児に関する友人からのサポートが多いほどピア・マネージメントが高くなるという促進要因も示されており、子どもの友人形成にはまず親の友人ネットワークが重要であることが示唆された。



注) 子どもの性別・卵性および保育所(幼稚園)への通所経験の有無による違いを統制するため各統制変数からすべての観測変数にパスを引いているが、図を簡略化するため掲載しなかった。5%水準で有意であったのは、性別×卵性変数から「子育てストレスの高さ($\beta=25$)」のパスのみだった。

図1 母親のピア・マネージメントに関連する要因モデル (値は%)

(3) 研究総括

子どもが仲間を増やし、一緒に遊ぶようになることは、仲間関係の発達の重要な一側面である。本研究では、この仲間関係の発達に対して影響が強いのは、信頼や愛着といった親との情緒的な関係性よりも、対人ネットワークの大きさであるという結果が示された。また、2つの研究で扱った親によるピア・マネージメントに関する結果に注目すると、子

どもの仲間関係の発達には親の積極的な関与が不可欠であり、その実現のためには親自身に友人関係があることが重要であることが示唆されていた。この結果は、子どものパーソナリティや社会性の発達について論じた Harris(1995)の集団社会化理論に通じるものであり、子どもが友人関係を発展させた先の社会性の発達にも影響する重要な要因のひとつを知ることができたと考えられるかもしれない。

今後は、3歳以降になった子どもたちにも追跡調査を実施し、子どもの社会性の発達や仲間関係における問題行動傾向への影響メカニズムについて詳細に検討していきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ① 酒井厚、母親によるピア・マネージメントとその関連要因—母親の精神的健康とソーシャル・サポートの観点から—、山梨大学教育人間科学部紀要、2010、査読無、11、233—239

[学会発表] (計1件)

- ② 酒井厚、母親による乳幼児のピア・マネージメントとその関連要因—母親の精神的健康とソーシャル・サポートの観点から—、日本健康心理学会、2009年9月8日、早稲田大学国際会議場

[図書] (計1件)

- ① 酒井厚、明石書店、ダニーディン子どもの健康と発達に関する長期追跡研究—ニュージーランドの1000人・20年にわたる調査から[翻訳]、2010、全400頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 厚 (SAKAI ATUSI)
山梨大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：70345693

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし